

[比較文化]

異文化理解

——「理解」できたらもう「異文化」ではなく、
「異文化」なら理解できない？

ビジネスの世界で、こんな笑い話がある。日本人経営者が米国人に仕事を持ちかける。Yes, I can と快く引き受けてもらえたので、安心して任せたが、ダメだった。反対に米国人上司が日本人に仕事を依頼したが「いやいや私などでは、とても」と辞退するので交渉が成立しない。米国人は信頼を失い、日本人はそもそも信頼を築けない。笑い話というが、これは実際に頻発する。ことほど左様に「異文化理解」は難しい……。

そこで「異文化理解」の定義だが、そもそもこの五文字成語に正確に対応する欧米語は存在しないようだ。傍証となるのが、1934年に外務省の外郭として創設された「国際文化振興会」KBS。日本文化の国際振興を目指すこの国策機関発刊の機関誌名が『国際文化』だが、「国際文化」など、世界中、どこにもあるまい。KBSの後身が「国際交流基金」だが、その英文表記 Japan Foundation には「国際」も「交流」もない。この国ではしきりと「国際社会」への参入と「異文化交流」が推奨される。日本の大学の教養課程に「異文化理解」の旗印のもと、「比較文化」なる科目が広く導入されたのは1980年代末。1989年の中学校学習指導要領の改訂を準備した教科審議会答申では、「国際理解教育の推進」が謳われ、文科省初等中等教育局が「異文化コミュニケーション」の円滑化を、英語など外国語科目での目標に挙げた。ここでの「国際理解」は英語表記では intercultural communication と食い違っている。

さらに2017年告知の新学習指導要領に「異文化コミュニケーション能力」

が掲げられた。その用語は、「情報理論」communication theory と言語学用語の「言語能力」competence の混成和訳に他なるまい。だが「異文化理解」にあつては、これら両者の「文化的負荷」こそが問われる。まずクロード・シャノンに依拠した「情報理論」は、通信技術における記号伝達の効率性を公準とし、異言語間の翻訳に伴う伝達内容の変貌は、視野に入れない。機械的「コード変換」encode-decode による「情報伝達」の円滑さに立脚する理論は、翻訳を通した「理解」とはなにか、といった難問に踏み込むことを、事前に回避している。また「言語能力」は、現実には日本語母語者の英語力、まさに冒頭の笑い話 Yes, I can. つまり empowerment (「権限付与」が日本語の定訳) の推奨にはほかなるまい。そしてこうした日本語的美徳の謙遜や儒教の「巧言令色鮮^{すくな}し仁」「沈黙は金」などには、意思疎通の低能、言語能力の貧困との烙印が押されかねないだろう。

ここからは、さまざまな問題が引き出される。①まず「理解」とは何か、という哲学的な問題。端的に言って、価値判断において鵜呑みにできず、また行動規範でも相応しい「選択」が取れない文化環境が「異文化」だろう。となれば「異文化」である限りそれは定義として「理解」できず、逆に「理解」できたときには、それはもはや「異文化」ではありえまい。とすれば「異文化理解」とは「自分が当然と思っていたことが否定される」葛藤を通して、「自分には納得できない価値観」を受容してゆく過程での「経験」を指す、と言い直すのが適切だろう。②だがここまで来ると、「異文化」や「理解」の定義そのものが揺らぎ始める。日本人のアメリカ理解、東洋人の西洋理解などが、かつて話題とされた。だが振り返れば親子間や夫婦間の関係も、相互に「永遠に理解できない」「異文化」の筈。事態は「国際結婚」に限らない。むしろ「国際結婚」なる枠組こそ、「特殊日本的」な現行の戸籍法に囚われた桎梏と判明する。流動性の低い非移民社会ならばこそ、「異文化理解」が「国際問題」となる。③その裏には、暗黙のうちにひとつの古臭い二項対立が潜んでいる。つまり一方には、土着性で「ウチ」でしか通用せず「ソト」への適応性に欠けた「国内人」、他方では無色透明で国境を自在に往還する能力を獲得した「国際人」。だが「国際人」も「異文化」の桎梏を抱え込む。特定の出身国の利害代表者たる外交官、英語万能で無国籍者を演じる国際機関勤務者、そして複数の人格を場合によって使い分ける秘密課報員、スパイやエージェント。

④ここで対処法が三つに分岐する。中江兆民『三酔人経綸問答』を振るなら、まず、「日本人」なのだから外国に出ても主義主張を変えるには及ばぬという「豪傑君」。反対に「理解して貰えないと自分の存亡に関わる」から「郷に入っては郷に従え」が相応とみる外地順応型の「洋学紳士」。だがこれが「回帰不能地点」を超えると、日本という風土への「大気圏再突入」に失敗して弾き飛ばされたり、帰還途中で燃え尽きたり……。そこで第三に、内外で人格を使い分ける「臨機応変」の「難解」先生が登場する。難解＝南海先生は文脈即応で「多重人格」を演じるが、「ホンネ」と「タテマエ」の「統合失調」となれば、それこそ「日本人」に典型的な無節操、裏表ある二心と批判されかねぬ。同様の「人格障害」は、夏目漱石や魯迅を先例として留学生や移住者も切実に体験する。

⑤となると「異文化理解」は「自己人格の脱皮」を迫る「危機」を意味することになる。「異文化」が「理解」できた時、認識主体の「自己同一性」self-identityは、もはや維持されまい。ここで振り返るなら、「自己同一性」概念そのものが、元来は法律的な責任主体を確定するために導入された「社会的擬制」だった。「司法的同一性」は犯罪人処罰のための立法的根拠として要請され、「国民－国家」体制を維持するために枢要な「国籍」条項とも連動する。義務教育から納税、国民皆兵に至る制度の保証および根拠が「国籍」なのだから。

⑥近年の「仮想現実」virtual reality（和訳は誤訳の嫌疑あり）の拡大にあつては、自らの「化身」avatarを増殖させる当事者も多い。これは現実社会の規範から離脱する「人格の複数化技術」であり、潜在的に開発可能な「異文化」は現在、電子環境下に急成長を遂げている。これは社会倫理的課題に直結する。ここで「倫理」を通常とはやや異なる意味で導入したい。なんらかの体系に則った行動規範を「道徳」とするなら、そうした道徳同士の衝突が発生する交錯の場でいかに振る舞うかが「異文化理解の倫理」の直面する課題となる。①歴史的に翻ってみるならば、20世紀を支配した「国際秩序」とは、西欧世界が自らの「正義」に沿って構築した世界像だった。「アジア」といい「アフリカ」といい、それらはフェニキア人が自らの東、あるいは南に位置する「外部」を呼んだ語彙に由来し、地中海に展開したその末裔たるカルタゴを滅ぼしたローマ帝国が継承した世界観に他ならない。プトレマイオスを淵源とするT字の

世界模式図が三分割する残余、北西の僻地が「ヨーロッパ」であり、いわゆる「大航海時代」以降、欧州諸勢力はキリスト教の宣教を正義の旗印として、世界制覇を成し遂げた。それへの反作用が共産主義革命から第三世界の再勃興へと連鎖を遂げ、冷戦時代の終焉とともに、欧米主導の世界秩序そのものが揺らいでいる。②「百科事典」的に「外部」＝非西欧世界を「他者理解」の対象物として「編纂」する、かつての文化人類学的な学術成果そのものが、現在の「全球化」global 状況で抜本的に問い直されている。「上から目線」で特権的視座から他者を観察する「中立・客観」な「比較文化学」の権威性が糾弾される一方、西洋世界への叛逆もまた、西欧での教育の果実に他ならぬという逆説も顕になった。いわゆる「原理主義」の善悪二元論的な西欧忌避は、皮肉にも「西側」The Westに胚胎して「その残余」The Restへと伝播した「副作用」なのだから。③それならば対立する価値観は弁証法的に止揚できるものなのか。「弁証法」dialecticは「対話」dialog 原理に通じ、そこには「論理」logicを尊重する理性意志偏重が透視され、それが新自由主義にも「投資」される。④もとより自然科学を支配する原理は形式論理学で言う「無矛盾律」「排中律」貫徹による「第三項排除」であり、肯定と否定とを同時に受け入れる寛容を認めず、肯定でも否定でもない非決定の「余地＝間隙」marginを極力排除する。⑤さらに度量衡の全球的統一を旗印とするグローバル化は「多文化共生」とは原理的に相反する。⑥無限集合を数学的基礎とする経済市場、無軌道に拡大したglobal 国際金融は、すでに実体経済を桁違いに凌駕し、人類による資源乱獲は地球生態系の平衡限界を超える「人新世」Anthropoceneを迎えるに至った。——喧伝される人類史の「危機」だが、古典ギリシア語では「危機」crisisは語源上「批判」に通じ、「選択」を要請する。「異文化理解」＝「自己脱却の営み」が直面する「危機」こそ、「跨文化倫理」cross-cultural ethicsの課題となる。「文化を跨ぐ」「跨文化」transcultureの「跨ぎ＝間隙」margin、即ち（車輪と車軸との間の）「遊び」jeuに不可欠な潤滑油の「倫理」。その模索が、今求められる。

[稲賀繁美]